

第二十八回 Neesima Room 企画展公開講演会

二〇一〇年二月一日

於 クラーク記念館二階 クラーク・チャペル

島津家と近衛家

—京都から薩摩への文化伝承—

尚古集成館館長 田 村 省 三

はじめに

みなさん、こんにちは。ただ今ご紹介いただきました田村でございます。今朝、鹿兒島を発って参りました。今朝も鹿兒島はだいぶ冷え込んでおりましたが、昨日は鹿兒島の大口というところは零下四度でございました。鹿兒島市内も二度でございました。それに比べますと今朝はちょっと暖かかったですね。鹿兒島というところは、南国なのでございますけれども、やっぱり冬になるとかなり冷えるのでございますね。そういうところから今日出て参りましたが、先生方に「遠いところありますがありがとうございます」と、こうごあいさつをいただくので

すが、私、今朝八時十分の飛行機で参りまして、もう十時半には京都に着いておりましたんで、そんなに遠いところではないのでございます。しかも来年になりますと、九州新幹線全線開通ということでございます、新大阪の駅からはございますが、鹿児島まで四時間かからないという、JRで来ましても近いところになります。

私は尚古集成館館長をしておりますが、島津興業という会社の観光事業も担当しております、こういうところに参りますと、観光の宣伝もしなきゃいけないということでございますので、よろしくお願いいたしたいと思えます。島津興業ってどういう字を書くんですかとよく聞かれます。吉本興業の興業と一緒に参りますと申しますと、じゃあ、タレントは何人いらっしやるんですか？ と聞かれるんですが、私どもの会社が設立されたのが大正十一年でございまして、その頃はどうも興業というのはいやれた名前だったんじゃないかなあというふうに思えます。島津家も島津興業という会社を作っておりますが、例えば高知の山内家にも山内興業という会社がございまして、当時は流行の名前だったのかなあというふうに思っております。

今日はお寒いところお出かけいただき、そしてまたこのような由緒のある場所をご提供いただきまして、参加者の皆さま、そして同志社大学の皆さま、ありがとうございます。これから、「島津家と近衛家」という演題でお話をして参りたいと思えます。副題としては「京都から薩摩への文化伝承」、このような視点から少し島津家と京都の関係を眺めてみたいと思っております。

ところで、この箱に貴重なものが実は入っております。先程大切にお持ちいただいたものがございますが、先程田端副学長先生からキャンパス内の発掘調査をしておりますというお話がございました。そのことに関連して、この中に極めて貴重なものが入っております。この同志社大学は薩摩藩邸の跡地に建ったとい

うことでございます。薩摩屋敷、二本松邸があったということは皆さんご承知だと思いますが、この発掘調査で出土いたしました発掘品を今整理をしておられるところでありまして。ちょうど二日前にですね、「あれ、これって」というものが出てきましたよ。何かと言いますと、これでございます。わかりますね？ 日本国中で一番有名な家紋でございます。丸十。島津家の家紋のついた茶碗が二日ほど前に確認されたのでございます。

私は、こんなものはゴロゴロ出てくるんだろうと思っていたんですが、今度の発掘調査で初めてこの丸十の家紋のついたお茶碗が出てきたということで、今日来られた方がたは本当によかったですね。私も先程初めて拝見したんですから。こういうものが出てくるんですね。当然といえば当然で



島津家家紋入磁器（歴史資料館提供）

ございますけれども。でも丸十は初めてだと、おっしゃっておられました。「丸十を探せ、丸十を探せ」というふうに学生さんに言つて、ようやく出てきたんだそうでございます。こういうものが見ついたら二日ほど前に確認されたということでございます。したがしまして、この同志社大学の建てられている場所というのは、島津家と本当に関わりのある敷地であるということがおわかりになると思います。

それでは、ここからはスライドでお話を進めてまいりたいと思います。今年の私の講演もこれでほぼ最後でございますので、やっぱりここから始めなきやいけないでございます。今年

は坂本龍馬ですよね。先程冗談でこの遺物は坂本龍馬が使った茶碗のかけらでございますと、こう言ってもいいんじゃないかという話が研究室で出ました。(笑) 龍馬は、天保六年の生まれでございます。ついこの間亡くなったような気がしますけれど。(笑) 慶応三年の十一月十五日に亡くなっておられますね。三十三歳で亡くなられたわけであります。

さて、同じ天保六年生まれの方が天



天璋院篤姫

璋院篤姫でございます。この方は明治十六年に四十九歳で亡くなっておられます。私がこの写真を出しますと、なんだ宮崎あおいじゃないのかと、こういうふうに言われるんですが。私も宮崎あおいさんの写真を出したいのですが、私どもの博物館に二枚、天璋院篤姫の写真が残っております、その一枚でございます。四十九歳で亡くなっておられますので、おそらく最晩年の写真だろうなあと思いますけれど、いかがでございますか？ 「篤姫、どんな女性に見えますか？」とこの写真をお示しながらご質問しまして、優しそうな、と言われたことはまずございません。ご覧の通りでございます。かなりしつかりした、しかも厳しそうな女性に見えますね。そりゃそうだと思います。十九歳で鹿児島を離れまして、十三代將軍徳川家定夫人になるために江戸に向かうわけであります。四十九歳で亡くなるまで三十年間一度も鹿児島に帰られたことはありません。そして幕末には江戸城を薩摩藩が攻めるといことになるわけであります。

したがってその時に官軍の大將であった西郷さんが、あなたは島津家の方なんだからこちらに帰ってらっしゃいと言うんですけれど、帰ってこれないですね。一度徳川家に嫁いだからには徳川家の女性として私は死んでいくと。ただし徳川宗家の家名を残していただきたいという願いをいたしまして、最後まで江戸城を出ないわけがあります。そして彼女の希望通り、徳川宗家は今日も続いているということでもありますから、芯の強い女性であったということがわかるわけであります。

そしてもう一人天保六年に生まれたのが、この小松帯刀であります。「篤姫」、大河ドラマを思い出していただきますと、小松帯刀は瑛太が演じましたけれど、瑛太に負けないぐらいのいい男じゃありませんか。写真ですからこれは。この方も三十六歳で亡くなるんですね。もし、彼が長生きをして、もう少し明治維新政府の事業に携わったとしたら、西郷さんや大久保さんを超えた実績を残しただろうというふうに言われております。

西郷さん、大久保さんは、はじめこの小松帯刀の指示で動いていたわけです。西郷さん、大久保さんは薩摩藩士の中でも高い位の侍ではありませんでしたが、小松帯刀は家老になることのできる、そういう家格の家に生まれた侍でありました。したがって、小松帯刀がもう少し長生きをしていれば、西郷さんや大久保さんよりも維新の歴史の中で名を残したんじゃないかというふうに言われるわけです。

日本の近代を準備した薩摩

さて、私は南九州は、薩摩というところは、日本の近代を準備したところであると考えております。ここに書いてありますように、鹿児島は日本近代化の孵化装置、いわゆる準備をしたところだったと考えております。この写真が集成館という工場群であります。この写真自体は明治五年に撮った写真であります。慶応年間、幕末の慶応年間にはすでにこういう姿をした当時東洋一の工場群が鹿児島に存在していたわけです。何故かと申しますと、南九州、鹿児島は常に世界の歴史の影響を真っ先に受ける地域であったからであります。鉄砲の伝来、種子島でございますね。それからキリスト教の伝来、ザビエルが初めて上陸したのが鹿児島でございます。そういうふうにこの鹿児島の地という



明治5年の集成館工場群

は常に世界の歴史の影響を真つ先に受けるところでございまして。なぜならば、ヨーロッパを出た船はどういう航路を辿つて日本にやってくるかと申しますと、まず大西洋を南下いたしましたして、アフリカの南端を通つてインド洋に出て、東南アジアに出て、そして北上がってくるわけです。したがつて日本の南の端にあるということは、真つ先に世界のいろいろな文化の影響を受ける。そういう地域だったということであります。言葉を変えて言うならば、海に開かれた南九州は海からのインパクトによつて変化せざるをえないという地理的な必然性を持つていたわけであります。

近衛家と島津家のつながり

さて、ここから島津氏の話になつてまいります。これはかつて京都の高山寺にあつて、今は島津家にある武将像。これが、島津家の初代島津忠久の像であるというふうに伝えられております。どういふ人であつたかと言いますと、本来は惟宗という家に生まれた武将であります。惟宗忠久と最初は名乗つておりました。惟宗忠久は、はじめ摂関家の武士でありました。藤原家・近衛家に仕えた武将でありました。ですから本来は京都



伝島津忠久像

の侍であります。摂関家を守り、そして皇居を守る、都の武将でありました。そして鎌倉時代になりますと、鎌倉幕府の御家人になるわけであります。そして、源頼朝の命によって南九州にあった藤原家の荘園、これは日本最大級の荘園と言われている島津荘の役人になるのです。以来、惟宗忠久は島津と改姓いたしました、島津を名乗ることになります。したがって、この初代島津忠久という人はもともとは京都の侍であり、鎌倉幕府の御家人であり、そして南九州にあった日本最大級の荘園、島津荘の役人になることによって島津を名乗ったわけでありました。したがって、島津の名前はもともと南九州にあった藤原家の荘園の名前であったということです。また、島津氏の系図を見ますと、源頼朝の庶子がこの忠久だというふうに書いてありますけれども、最近の歴史研究では藤原家や頼朝に非常に近い人物ではあったけれども、頼朝の庶子ではないということがわかっております。しかしながら、鎌倉の御家人の中でも非常に大きな力を持っておりました、比企氏という家がございますが、この比企氏の親戚に当たる人物がこの島津忠久であったということはわかっております。しかしそれならば、なぜその藤原家、近衛家、さらには頼朝に近侍していたこの忠久が、都や鎌倉から遠く離れた南九州の役人に任ぜられたのかということがございます。これは島津荘という藤原家の荘園の成立から見て行かなくてはなりません。

島津荘の成立ということですが、この木像はどなたかと申しますと、藤原頼通という方があります。藤原道長の子でもあります。したがって関白という位についた非常に位の高い貴族でありますけれども、実は島津荘の成立というのは、当時太宰府の役人で平季基という人がおりまして、この方が万寿年間に現在の宮崎県都城市。宮崎県の内陸部になりますね。この都城市付近の土地を開発することによって成立して、その土地を関白藤原頼通に寄進したところから始まった荘園でございます。藤原頼通が建てた建造物で有名なもの

に、宇治の平等院がございませぬ。この平等院に南九州と関わりの深いあるものが使われているのです。

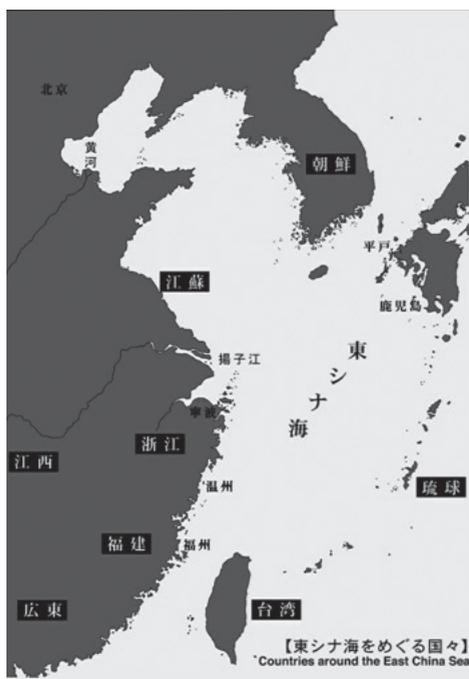
これは平等院で復元をされた、鳳凰堂の天蓋螺鈿でございませぬ。平等院の内部は夜光貝という貝の真珠層を使った螺鈿で飾られておりました。したがって京都の藤原頼通のもとには数多くの南海産の夜光貝が贈られていたことが、この平等院鳳凰堂を見るとわかるわけであります。夜光貝というのはこういうものですね。南海産と言いますから、今の種子島とか屋久島とか奄美大島で捕れるんです。この夜光貝の他にも南海産のものは檳榔がございませぬ。檳榔っていうのは、都に來ると何に使われるかご存じですか？ 牛車というのがございませぬ。葵祭にも出てまいりますね。あの牛車、上級貴族の乗る牛車には檳榔毛車といまして、檳榔を裂いたもので裝飾したものがございませぬ。したがって先程の夜光貝にしるこの檳榔にしる京都に参りますと、上級の貴族しか用いることができないものであつたということでありませぬ。ということは、藤原頼通が平等院を多くの夜光貝の螺鈿で飾つたのは、彼が南九州にある地盤を持つていたということを証明しているわけでございます。すなわち島津莊の最初のオーナーが藤原頼通であつたということなんでございませぬ。中尊寺の金色堂も夜光貝の螺鈿で飾られております。ですから当時の裕福な武士であるとか貴族は、南海産の夜光貝を手に入れることが経済力の象徴でもあつたということが言えるわけであります。他に奄美大島には赤木といって京都にもたらされますと、寺院の建築に用いられたりするような材木、こういう珍しいものもありました。すなわち、このような南海産の産物を入手できる基盤が藤原頼通にはあつたということでありませぬ。

島津氏と海外交易

しかし、南九州は都からあるいは鎌倉からは遠く離れているんですね。どうして島津忠久が南九州の役人に任じられたのかと言いますと、その前の時代をみるとよく理解できません。平安時代の末期に武士を統理していたのは、皆さんご承知の平清盛でございますね。

平氏でございますが、平氏はどのようにしてあの巨万の富を短期間に貯えることができた

のかといたしますと、実は中国との交易の存在であります。当時南宋という中国の王朝が現在の中国の南の方にありまして、平氏は南宋との交易をしておりました。そして平氏が滅んだあとも、この南宋交易の道というのは日本にとつて非常に大事なものでありまして鎌倉幕府においてもこの貿易ルートの確保というのは大きな課題でありました。実は鎌倉の街は南宋の文化で彩られております。南宋の文化というと、一言で言うところの文化化であります。鎌倉五山というのは禅宗の寺院であります。鎌倉という街は、南宋から移入された禅の文化がバックボーンにあるわけで、いかに鎌倉幕府が南宋との交易を大事にしていたかということがこのことからよく理解できるわけにあります。それではそういう証拠はあるのかと申しますと、この間大雨で大変な被害を



受けました奄美大島であります。宇検村に倉木崎というところがございまして、海底遺跡が存在しております。交易船がたぶん沈んだあとだと思われませんが、中国製の陶磁器が積み重なった状態で埋蔵されております。これは発掘作業の様子です。それから南九州、薩摩半島に南さつま市という町がございまして、そこに持躰松遺跡という遺跡がありますが、ここからは十一世紀から十五世紀にかけての中国製の陶磁器がザクザク出てくるのです。ここから出てくる遺物と同様のものが鎌倉でも出てまいりますから、明らかにこの道は中国との交易ルートであったということがわかるわけでありませう。

さて、島津氏が上洛する時にどんなものを京都の貴族に、あるいは將軍にお土産として持っていったのかという記録が残っております。これは島津元久が薩摩の国の守護になったというところで、御礼言上のために応永十七年、一四一〇年に京都にやってきておりますが、この時には將軍足利義持に拜謁の際には青銅二千貫と唐物ですね。それから絹布。將軍を宿所に招いた時には虎皮であるとか、麝香であるとか南蛮酒であるとか、砂糖漬けというような、いわゆる東南アジアの産物がお土産として献上されております。そしてこの時に、宴の余興として残っていた麝香を盆に盛ってとらしめたところ、「老若君上を省みず狂進奪取した」と記録にございます。つまり將軍がそこにおられるのに、お盆に麝香を出したら、將軍の周りにいた多くの侍が奪うようにして、麝香を取ったという記録です。したがって、島津氏が都に上る時に持つてくるものというのは、南海産の産物なんです。つまり東南アジアで手に入れることのできる貴重なものであったということです。先程特別展が行われております隣の部屋にハリスという先生がお持ちになっておられた薬品が展示されておりましたが、その中に琉球産のウコンとか琉球産のなになにとか、琉球産の薬種がたくさん展示されておりました。この麝香なんているのも薬種の一種なんです。超高級な薬種であります。そういうものを島津氏は土

産として、上洛の際に持参したという事でございます。

このように、島津は中国や東南アジアと盛んに交易をしていたわけですが、交易をする時には、中国語で文章のやりとりをする必要があります。つまり今でいう外交官が必要なんです。それは当時の臨済宗のお坊さんでありました。この方は桂庵玄樹とおっしゃいますが、臨済宗のお坊さんであります。そして雪舟と一緒に中国に渡って、当時の中国の学問、進んだ朱子学の勉強をして、日本に帰ってこられます。本当は京都に入って、自分の学んできたことを普及したいと思われたんですけれども、応仁の乱の直後でありまして、京都に入れないということで各地をめぐられまして、結局鹿児島に落ちつかれました。そして、鹿児島で薩南学派という新しい朱子学の学統を開かれます。桂庵禪師は山口の方なんですけれども、鹿児島で今我われが習う漢文の訓読法の原点になるものを確立されたんですね。漢文っていうのは中国語を日本語読みにするわけです。そのためには訓読法が必要です。上中下とかし点とかあるじゃありませんか。あの漢文の訓読法の基礎を作られたのが桂庵玄樹であります。したがって鹿兒島では臨済宗のお坊さんを大変大事にしたわけでありませぬ。

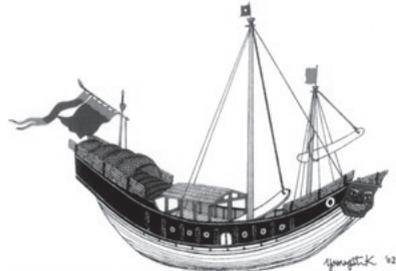
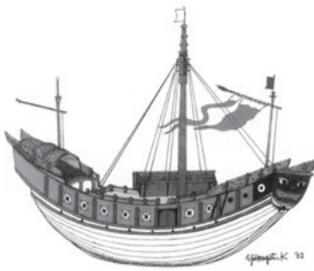
大航海時代と南九州

さて鉄砲とキリスト教の伝来。鉄砲伝来が天文十二年一五四三年、キリスト教の伝来はその六年後の天文十八年一五四九年でありますね。そういうことで種子島や鹿児島に異国の文化が伝えられたということでありませぬ。これはヨーロッパで一五八七年十六世紀の終わり頃、大航海時代に作られたアジア図であります。アラビ

ア半島、インド、東南アジア。これが日本でございますね。大きくいたしますと、こうなります。まだ日本の形を正確に認識しておりませんね。しかしながら、その日本の一番南にCangoxinaと書いてありますね。つまり大航海時代のヨーロッパ人は、すでに日本の南に鹿兒島という重要な交易港があったということを認識しておりました。ここにはLequioと書いてありますが、これは琉球諸島であるということがわかります。

これは少し時代が下りますが、十七世紀の中頃、モンタヌスというヨーロッパ人が、自身は日本に来たことはないんですけども、日本に行ったことのある友人に聞いて、『日本史』という本をヨーロッパで刊行いたします。

ここに鹿兒島(CANGOXUMA)と書いてありますね。これが錦江湾でございます。錦江湾のほとりに城下町が広がっている様子が描かれています。そして、浮かんでいる船のほとんどは日本の船には見えないんですよ。ジャンク、中国の船がたくさん浮かんでいる様子が描かれておりますが、こういう姿が本当の風景であったのだらうかということでもあります。実はこの時期の日本を語る時に欠かせないのは倭寇の存在であります。私どもは倭寇ということとイコール海賊というふうに習ったんですが、確かに十四世紀から十五世紀の倭寇は海賊と言っていると思うんですけども、十六世紀の倭寇は、実はイコール海賊ではなくて、イコール商人と見た方がいいですね。というのは



ジャンク図 (山形欣哉画)

当時、中国は鎖国（海禁）をいたします。ところが、それまで海外交易をしていた中国の商人たちは困窮して、中国の国禁を犯して海に出ます。それが倭寇であります。それから同時に日本人も東南アジアに盛んに出ていて、日本人町を形成いたしました。そしてそういうことを可能にしたのが、もうすでに世界遺産になっております石見銀山の存在であります。なぜ石見銀山が世界遺産になっているかというと、当時の世界の銀産出の三分の一を供給していたからであります。この石見銀山を開発したのは博多の商人でありますね。そういう経済的な背景があつて、いわゆる日本と海外の人々の交流がこの時代さかんに行われたのであります。鉄砲を種子島に伝えたポルトガル人を案内したのは五峰、あるいは王直といわれる倭寇であつたことがわかつておりますし、ザビエルがマラッカから鹿児島まで乗船したジャンクの船名は海賊号、船長はアバンという倭寇であつたということがわかつております。彼らが乗っていた船が先程の絵に描いてあつたようなジャンクなのでございます。

さて、先程の絵がいかにかに正しいかということを証明する記録がございます。藤原惺窩という先生をご存じていらつしやいますね。江戸の昌平坂学問所の責任者でありました林羅山の先生。京都の儒学者でありますね。当時日本を代表する京都の大先生であります。藤原惺窩は中国の学問を勉強するにはやはり中国に行くべきであるということ、中国に渡るうとなさいます。そして鹿児島にやってくる。それが関ヶ原合戦の四年前、慶長元年一五九六年であります。南九州の各地を歩かれまして、そして山川という港から中国に向けて船出されるんですけれども、結局中国に行くことはかきませんでした。船が破船をいたしましたね。しかしこの時の体験を藤原惺窩は記録に止めております。ここに書かれていますのは大隅半島の内之浦という、宇宙空間観測所のロケット発射場があるあの内之浦でございますね。私の子供のころは陸の孤島といわれていたところであり

まして、今でも鹿児島市から大変不便なところではありますが、その内之浦で藤原惺窩が関ヶ原合戦の四年前に体験したことです。「中国や東南アジアの人々、あるいは海外へ渡航するため日本各地から集まってきた人々、こうした人たちが街中に溢れている。接待を受ければガラスの器にワイン、外国の珍味が並ぶ。」と書いているんですね。私は、当時の南九州の津々浦々がこのような様相を呈していたと思います。つまり東西の文化がぶつかっている。海に開かれたこのような交易港がたくさんあったというのが当時の南九州であります。

それからジョルジュ・アルヴァレスという人が『日本報告』というレポートを書いておられますが、実はジョルジュ・アルヴァレスの『日本報告』を見て、日本でキリスト教を伝えたら、理解してくれるかも知れないと思ったのが、フランシスコ・ザビエルなんですね。ザビエルはこのジョルジュ・アルヴァレスの『日本報告』を見て、日本に行きたいと思ったわけであります。ジョルジュ・アルヴァレスは船を修理するためにしばらく山川の港にいます。そのときのことを『日本報告』に書いています。この地域の人々は清潔である。そして親切である。礼儀正しいと書いてます。彼がこの地域の人々と言っているのは山川の人々なのです。その『日本報告』に出てくる九州の地名、博多、阿久根、京泊（川内）、坊津、山川、鹿児島、根占、宮崎の串間ですね。宮崎の南郷、日向、豊後なんていう地名が出てきますね。それから面白いのは、この地域の人々は朝夕、海岸に穴を掘って入浴すると書いてあります。もうピンと来ておられますでしょう。有名な指宿の砂蒸し温泉なんですよ。あのようなお風呂がもうすでにこの当時あったということでもあります。

戦国期の近衛家と鳥津家

さてジョルジュ・アルヴァレスが、この地域の人々は礼儀正しい、清潔である、親切であると書いた、そういう地域が鹿兒島であったということになります。実はその鹿兒島の人々の教育に大きな影響を及ぼしたのが、鳥津忠良（日新）の『いろは歌』と言われているものでございます。この日新公というのは鳥津家の中でも大変有名な方でございますが、鳥津家の当主ではありません。忠良（日新）の息子が十五代鳥津貴久という人でありまして、貴久を鳥津中興の祖と言いますが、忠良は貴久の父であります。その忠良が、天文十五年一五四六年に編纂した和歌集が『いろは歌』です。いろは四十七文字で始まる四十七首の和歌に、道徳・宗教を織り交ぜたものでありまして、これが実は江戸時代の薩摩藩士の教育の根幹になってまいります。忠良は当時、近衛植家に『いろは歌』を献上いたしました。この『いろは歌』の後ろには、植家の跋文が付されており、ただ忠良はこの『いろは歌』を直接近衛家に送ったのではなくて、当時一流の京都の文化人でありました、花本宗養という人物に送りまして宗養が例えばいろはのいであれば「いにしへの道を聞きても唱へてもわが行ひにせすばかりなし」という忠良の作った和歌に、それに応える文章をつけているんですね。その宗養の文章とこの『いろは歌』四十七首すべてセットになっておりますが、最後に、宗養が近衛植家にこの『いろは歌』を届けるんです。で、それに感心した植家がこれは大変な『いろは歌』であるという証明をする跋文をつけるんですね。そういう繋がり、もうこの時代にはあったということがわかっております。フランシスコ・ザビエルが鹿兒島に来た時、この地域の人々は読み書きができると書いてあるわけですが、鹿兒島の

人々の民衆教育に非常に貢献したといわれているのがこの日新公の『いろは歌』で、その『いろは歌』とまた近衛家が繋がっているということがわかるわけでありませう。

その近衛植家の息子が、近衛前久であります。流浪の戦国貴族と言われている人でもあります。例えばここに書かれておりますように、上杉謙信と血の盟約をして、越後へ下向して、上杉謙信の関東の平定を助けて、あわよくば上杉謙信を上洛させようとして働いた。非常に血の氣の多い近衛家の当主がこの前久であります。まあしかしながら、足利義昭と対立して、北陸に下向したこともございます。一時信長とも対立したこともあったんですけれども、最終的には信長と親友になったのもまた、この近衛前久でございます。この近衛前久、天正三年には薩摩に下向しております。そして日向の伊藤、それから島津、豊後の大友の和陸幹旋に努めておりますが、この時に和陸は成功いたしませんでしたけれども、当時の島津家の当主であった島津義久あるいは弟の義弘らと犬追物や連歌や能などを楽しんでたことが記録に残っております。そしてその見返りとして、島津氏は前久に茶壺ですとか琉球むしろというのは今の畳でございますね。それから沈香。それから紅糸、白糸などを贈ったというようなことが書かれておりますし、それから太守さまに、つまり島津義久に『古今集』のご相伝のお名入りがあったということが「伊勢守心得」、これは上井覚兼という島津家の重臣の書いた史料に残っております。どうということかという、前久は義久に『古今和歌集』を伝授した。つまり古今伝授を受けたということが書かれているわけでありませう。この近衛前久、人生の大半を京都で過ごさずに地方で過ごした人でありますね。

さて次は、その子どもの近衛信尹ということになります。この方も不思議な近衛家のご当主でありました。お父さんの近衛前久が大半を地方で暮らしたために、近衛信尹は幼いころを京都ではなくて、地方で過ごして

おります。したがってどちらかというところ、近衛家の当主とは思われないような行動をする人であったようでございます。これはもう私がお説明するまでもございませぬ。例えば、文禄・慶長の役の文禄年間にはどうしても自分も朝鮮に渡りたいということで、名護屋、肥前名護屋です。ここに秀吉の前線基地があるわけですが、ここまで行ってしまった方でございます。本来は関白になるような撰閥家の方がたは天皇の許可がなければ、京都を離れることはできません。大概は奈良の春日大社に参詣をするとか、そのようなことぐらいでしか京都を離れないわけでありませぬ。お父さんの前久がそうであったように、近衛信尹も大変積極的に外に出よう外に出ようとするのです。そういうことがあつて京都での生活に隙ができた時に、秀吉が関白になつてしまふという話になります。そういうことでありまして、ついには秀吉の怒りを受けて、鹿兒島に流されてしまふんですね。文禄三年から慶長元年にかけて流されております。文禄三年の四月十四日に東寺を出発しまして、大阪から瀬戸内の航路を辿りまして、鹿兒島の坊津というところで生活をされることになりましたが、五月二十一日に坊津に着いております。四月十四日に京都を出て、坊津に五月二十一日に着いております。結構早いと思われませんか？ 幕末になりますと、だいたい京都薩摩間というのは一週間ぐらいで行くんですけれども、当然蒸気船を使いますから。しかしこの時代ですよ。四月十四日に京都を出発しまして、五月二十一日には坊津に着いている。まあしかし翌年の七月十日には鹿兒島に移りまして、さらにその翌年には京都に帰つてくるということでもあります。もう許されての旅でありますから、帰りはかなり時間をかけてゆつくりと上京します。たいてい瀬戸内航路は、下る時にはいわゆる北の航路、山陽道に近いところを通つて参ります。上る航路はだいたい四国を中心に渡つて行くことになつております。これは『三藐院記』などをもとにして作つたものでありますけれども、なぜ近衛信尹、三藐院が南九州に流されたのかというと、南九州が日本の中央から

離れたところであつたという説もありますが、実は秀吉もその辺は心得ていて、近衛家と島津氏が近い関係にあるということ、島津に預けておけば安心であるということがあつたんだろうというふうに思います。これが坊津でありますね。国の名勝に指定されております。薩摩半島の一番南の端にありますけれども、大変風光明媚なところであります。坊津で信尹は、岡左兵衛と名乗りまして、可因と号しております。そして一乗院という大きなお寺がありました、ここのご住職たちと和歌や連歌や茶の湯を楽しんでおります。でも、最初は不平不満タラタラなんです。日記を見てもみすと。でもやがて「さのみ不便なことばかりにても候はず候。高麗の陣にはいかほどましたることともしりなく候へども」と、高麗の陣に比べればいかほどましたることかと最近は思っている、ということですね。そんなことで三貌院信尹がなぜ薩摩に流されたのかというのは、近衛家と島津家との関係が古くからあつたからであるということでもあります。

室町幕府の文化伝承と薩摩

それから、京都からの文化伝承ということで申しますと、細川幽齋が大切なはたらきをいたします。幽齋は足利家の家臣でありまして、そしてこの時代を代表する文化人でありまして、熊本の細川家のご先祖ということになりますね。細川藤孝とも言いますけれども、幽齋は、島津家に芸能者の斡旋を当時盛んにしております。例えば、池坊。これは立花ですね。お花の池坊です。一五七二年幽齋から島津氏の家臣喜入季久への手紙にこういう文章がございます。「池坊、貴国に至り下向の由に候。挿し花ささるること譜代の儀に候。太守へおとりなし専一に候。」花を立てるといことが大變都では流行して、誰でもやることなんだ。どうか喜入、

あなたから鳥津のご太守へおとりなしをしてくださいます。つまり、池坊も細川幽斎の仲介で鳥津家に入ってきたということがわかりますね。

また、能役者の幹旋もしております。能役者、シテ方一王太夫。これは天正二年、一五七四年の記録に出てまいります。このシテ方の一王太夫のほかにも『丹後細川能番組』というのはこれは細川幽斎の催した能の記録。『上井覚兼日記』というのは、鳥津の家臣の上井覚兼という人物の日記。この二つに共通する能役者がこれだけ出てきますね。堀池宗叱、堀池弥二郎、東寺ノ小四郎、入江権丞と、こういう能役者が細川幽斎から幹旋をされて、薩摩に下つてきているということわかるわけであり。ですからこの時代、日本国中で戦をやっているんですけれども、そういう時代にあっても戦国武将というのは文化を忘れないですね。今の政治家を見ますと、まあいろんなことをやっておりますが、文化を理解している人が果たしてどれぐらいいるのかわかりませんね。しかし、この時代は、戦国の代にあつてこれだけ文化というものを大事にしているわけであり。細川幽斎から鳥津家へ幹旋した芸能者たちというのは非常に多かつたということがわかります。たくさんさんの京都の文化が薩摩へ入つてきているわけであり。

それから伊勢貞昌という人がいます。この人は鳥津義弘の家老であります。有川貞真という人の次男なんです。この伊勢貞昌というのは薩摩伊勢氏、薩摩の伊勢氏なんです。本来の伊勢氏というのは室町幕府で有職故実を担当したお家です。しかし当時、本流は絶えておりまして、伊勢氏支流の伊勢貞知（如雲）という人が近衛家に仕えておりました。で、近衛家は室町幕府の有職故実が消えかかっているということを心配しました。そこでこの故実の家系を残すため近衛家の幹旋によりまして、有川貞真が薩摩伊勢家を起こしまして、貞昌が有職故実の伝授を受けております。つまり近衛家に避難をしております、伊勢流故実を伝えていたこ

であったり、それから幕末の動乱時期であったり、明治維新であったりという、たしかに武には強いんです。しかしその武を発揮するための裏付けとしての文化があるというところであります。島津家は鎌倉流といって、鎌倉時代以来の規式もずうっと伝えて参りました。そして絶えようとしていた室町幕府の文化、諸儀礼を近衛家を通じて薩摩に移植し、そして移植したものをさらに徳川家に持つていくという、そういう役割を果たして来たということでもあります。

その伊勢貞昌が相伝した故実伝授というのはどういうものであったかというところ、伊勢流故実というのは室町時代における武家の儀礼形成とともにあらわれてまいります。つまり足利將軍周辺の礼式でありますね。足利將軍というのは室町幕府ですから、京都の儀礼ということになります。本来は「むろまち」と言っちゃいけないだそうですね。「むろちよう」幕府が本当だということふうに聞いたことがあります。つまり京都の武家儀礼でございます。で、足利氏が京都に幕府を開いたことにより、公家と武家の文化が融合して、生活様式が変化したことに伴って、新しい武家の諸儀礼が必要とされます。わかりやすく言うと、豊の文化でありますね。豊の儀礼、そういうものが足利幕府によって成立するわけであります。そしてこれを担当したのが幕府政所執事を世襲した伊勢氏であったわけですが、それが絶えようとしたので、近衛家から薩摩島津にということになりますね。で、貞昌に伝えられた有職故実の内容は、伊勢如雲から伝えられたもので、料理、鷹飼、女房方故実、弓矢、武器、狩、乗馬、正月儀礼、將軍御成、婚禮、殿中儀礼、書札礼などであります。まあいずれも江戸時代、江戸幕府においても重要な儀礼として扱われているものがございますね。これはお正月飾りでありますけれども、そういう重要な諸儀礼というのが、近衛家を通して島津家に伝えられ、そしてそれがさらに江戸時代になりますと、徳川幕府に受け継がれていくということになります。これは、江戸城の平面図なんです。

全部量の間でございますが、ここで行われることというのは、非常に厳密なきまりがございます。將軍に拝謁するときは量の何枚目で拝謁するのとか、それから將軍がでてこられてお辞儀をする時に手が量の縁に触れるとか短刀の鞘が障子に触れたりすると、すぐその場所で下城差し止めつていうことになりますね。譴責を受けるんですよ。そういう細かい儀礼が江戸幕府にもありますけれど、それは室町幕府の儀礼がもとになって形成されたものであるということでもあります。そしてその仲立ちをしたのが、近衛家と島津家であるということでもありますね。

禁中太夫能役者虎屋長門守の役割

さて次は能役者の話です。先程の伊勢貞昌ですが、能役者とも関係があります。この能役者虎屋長門というのは、京都の手猿樂者であります。天皇の前で演能するときにはいわゆる観世とか金春、宝生とか金剛といった、いわゆる能役者の太夫は演能できなかつたんですね。であるとすれば、素人役者集団が作られるわけです。その一派を虎屋と言ったのです。私先程、御所の周りを散歩しておりましたら、お菓子の虎屋さんがございましたね。あの虎屋さんも関係があるのかも知れないなあとと思いますが、お菓子の虎屋さんと同じ虎屋を名乗る素人能役者の集団が京都にありました。その一人が中西長門、虎屋長門でありました。そして、伊勢貞昌とも親交のあった人物です。この人は天正四年に生まれておりますが、父宗以は二条家、近衛家に仕えた人物で、母は足利義昭の家臣、中西晴秀の娘であったというふうに言われております。十二歳の時に豊臣秀次に仕官。近江国小幡村、丹後国保津村を領し、小幡を称す。十七歳の時に秀次の罪、好色の密事と言われてお

ります。これは私が文書を読んで発見したんですが、好色の密事、まあ秀次だとありそうな気がするなあと思ったんですけど、どういふことかはわかりません。この罪を一身に受けて浪人となり、京都上立売通室町で虎屋と号し、呉服商を営み、一方で金春流の手猿楽の名手で本願寺の坊官であった下間少進に能を習った。この人がなぜか慶長七年鳥津家に仕えて、慶安三年に鹿兒島で亡くなっているんですね。どうして能役者を鳥津家に誘致したんでしょうか。

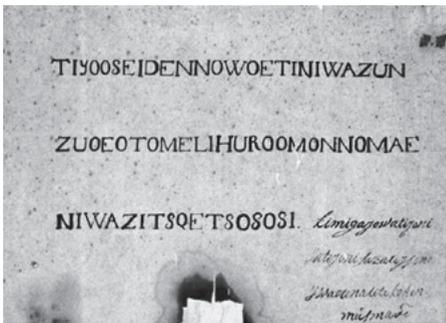
さてこの人は優秀な能役者ですよ。禁中での演能がいくつもわかっております。そして鳥津家に召し抱えられてからも、京都に呼ばれます。禁中黒戸御所で能十番を演じる。後朝の能というのは翌日も能をいたしますので、後朝の能。禁中で翁を演ずる。一番格式の高い演目ですね。禁中大夫というようなことで、大変優秀な能役者であったということがわかりますね。住んでいたところはこれ近くですね。それでこの虎屋を雇った薩摩藩最初の藩主、鳥津家久も京都にやってくる時には、この虎屋長門の家に泊まっていたらしい。それで大阪町奉行が虎屋長門の家は広いとは言っても、あなたは家臣と一緒に泊まるんだから狭いでしよう。近所の妙見寺に宿を移しなさいという、大阪町奉行所の文書が残ってますよ。まあそういう方でありませう。そして高三百石で召し抱えられるのでありますが、しばらくしますと、高千石を鳥津家から支給されます。千石取りの能役者ですよ。貴族でも江戸時代、千石を取っている家は珍しいのじゃないでしょうか。能役者が千石で鳥津家に召し抱えられた。しかも京都の宮中の能役者が召し抱えられた。どうしてかという、私はこの虎屋長門という能役者は宮中事情に通じている。そして屋敷がこの辺りであったとすれば、近衛家と繋がっておりますね。つまり、当時江戸時代初期の薩摩藩というのは関ヶ原では西軍に属しましたから、非常に不安定な時期であります。京都情報というものが欲しいんです。家久が能楽趣味を持っていたということは、確かにあると

思いますが、それ以上に京都情報を得るために、虎屋長門を使つたと考えた方が私はいと思います。

江戸時代の近衛家と島津家

さて近世に入つて参ります。桜島の手前の鹿児島湾に面白い形の船が浮かんでおりますが、これは琉球の船であります。薩摩七十七万石といえますね。加賀百万石、薩摩七十七万石、仙台の伊達が六十万石と言いますが、その七十七万石には内訳がございまして、七十七万石のうちの十二万三千石は琉球王国の石高であります。つまり江戸時代のはじめに薩摩藩は、琉球を領有することを幕府に認めさせております。で、琉球を自国領として扱いました。したがって当時の江戸時代の薩摩藩はこういう範囲、南北二二〇〇キロです。日本のだいたい三分の一の長さが薩摩藩。しかもほとんどが海であるという、特殊なかたちをいたしています。そして琉球王国というのは独立国でありましたので、異国を支配しているという、面白い藩であつたわけであります。したがいまして、こういう殿様が出てくるわけです。

これは島津重豪。歴代の数で言いますと、二十五代。シーボルトとオランダ語で話したという、八十九歳で亡くなつております。シーボルトの日記に重豪公はオランダ語でいろんな質問をしたということが書いてあります。書き初めもオランダ語で、つまりローマ字で書きますね。大きな文字



島津重豪筆ローマ字

も小さい文字も『薩摩琵琶歌』という薩摩琵琶を弾きながら語る、語り物の歌詞が書いてありますが、ちよつと読んでみます。

一行目「君が代は千代に」、二行目「八千代に細れ石の」、三行目「巖となりて苔の」、四行目「むすまで」と書いてあります。どこかで聞いた歌詞ではございませんでしょうか。実は『古今和歌集』のあの和歌は『薩摩琵琶歌』『蓬莱山』の中にも入っておりまして、めでたいということ、彼はローマ字で書き初めをしているんですね。明治になりました、大山巖がフエントンというイギリス人の作曲家に、あなたの国には国歌というものがありませんね。私が作曲してあげますが、なにかいい歌詞を探してらっしゃいと言われた時に大山巖は「蓬莱山」のこの歌詞を思い出したんですね。それが今の国歌になっていることでもあります。つまりこの頃には、ローマ字で書き初めをするような面白い殿様が出てくるということがあります。

これが明治五年の貴重な琉球船の写真。模型を作りました。こんな形ですね。方向を見失わないように目玉までついているんですね。三巴というのは琉球王家尚家の家紋であります。それからこのムカデの旗というのは、中国ではムカデは富を表すという。こういう極彩色の船なのでございます。こういう船が中国と沖縄、沖縄と鹿児島を結んでおりました。

さて幕末になりますと、日本も太平の眠りに浸っているわけにはいきません。各地に外国船が現れます。幕府のある江戸近



琉球船模型

くはもちろんのこと、長崎も当然であります。薩摩藩領にもいるんな船がやってくるんです。彼らは日本をあわよくば、自国の植民地にしようというようなことを思いながらやってくるわけです。まあ先程の話でもおわかりのように黒船は南から北にやってくるわけです。これに何とか対応しなければなりません。そういう時代に十三代將軍家定夫人になったのが篤姫であります。篤姫はまず近衛家の養女になって、家定夫人になるんですね。大名の子どもが直接將軍夫人になることはできません。ですから名目的にでも、上級貴族の養女になって入るのです。島津家から將軍夫人になったのは篤姫が最初じゃありません。先程のローマ字を書いた殿様重豪の娘、茂姫は十一代將軍徳川家斉夫人になっております。これもあとで申しますが、近衛家の養女として、徳川家に入ります。十一代將軍徳川家斉は五十年間、將軍の位にあったという人です。そして茂姫も元氣でありましたから五十年間、御台所であり続けた。つまり、大奥に大きな権勢を誇ったのが、先程のローマ字で書き初めを書いた殿様の娘、茂姫であります。この人の例がなければ実は篤姫は選ばれなかつた。なぜならば家定將軍は病弱であつたんですね。篤姫は三人目の奥さんであります。一番目の奥さんも二番目の奥さんも、京都の上級貴族のお嬢さんだつたんですけれども、お一人目は八年で、お二人目は一年で亡くなつてしまふんです。それで京都のお公家さんのお嬢さんもういいだろう。早く家定に元氣な男子を作つてもらいたい。家定は発達障害があつたと言われておりますね。大河ドラマ「篤姫」で言いますと、堺雅人さんが演じました。そして、時代はそれまでにないほどに変動をしております。そこで、早く元氣な子を作つてもらいたい。だから次はもう武家からもうおうとということ、前例はないかという時に茂姫の存在があつたのです。それで、茂姫の血筋の中から篤姫が選ばれて最終的に家斉夫人となつたわけです。

これが近衛家の略系図であります。植家、前久、信尹、その辺のお話はしましたが、近衛家久の奥さんは、

家のお嬢さんとして、江戸の將軍家に興入するということであったわけであります。これが島津家の歴代であります。先程の茂姫は重豪の娘、それから篤姫は斉彬の養女。そしてさらに近衛家の養女となって、それが將軍家が上がっていくことになりました。

さて、近衛邸と薩摩藩邸について、資料を見ていただきたいと思います。京都のあちこちに近衛家の別邸がありますけれども、だいたいはご当主が隠居されて別邸を造って移られます。その別邸を造る時にも逆に今度は島津家からの援助があったらうというふうを考えられます。それからこの二本松邸に移ってくる前の薩摩藩邸というのは、今の丸のあたり、錦小路にございました。ここは役人がたぶん数人しかいないという小さい藩邸だったと思うのですが、幕末になってまいりますと、例えば島津久光は千人を超える家臣を連れて京都に入ることになります。本格的な大名屋敷が必要になります。したがって、江戸の藩邸に準じるようなかたちで、二本松邸を作ります。本格的な京都における大名屋敷としては唯一、初めての屋敷がここに建てられております。現在の展示の資料の中に玉里島津家といって、島津久光が興した家がございますけれども、そちらから借用してこられたこの二本松邸の配置図がありますので、是非このあと、ご覧いただければと思います。



島津斉彬銀板写真

幕末の薩摩藩と京都

これが島津斉彬の本当の姿であります。篤姫の義理のお父さん。日本人が日本人を写した写真では、最も古い写真でありますので、写真ではただ一点重要文化財になっております。それから斉彬は常に世界を見つめていたということで地球儀をご紹介したいと思えます。これが斉彬が造った日本初の工業地帯集成館の絵図でありますね。これは反射炉と言って、大量の鉄を溶かして、大砲を鑄込む施設であり、この溶鋳炉は日本初の溶鋳炉。それから蒸気機関の研究所、ガラスの製造所があります。これは反射炉の模型です。これは復元した大砲ですが、人と大きさを比べてください。薩英戦争に使った大砲のレプリカであります。一五〇ポンド砲と言って、一五〇ポンドというのだいたい七〇キログラム。それぐらいの弾を飛ばす能力のある大砲、これをもう薩摩藩は幕末に自力で作っております。こういうことをやるのは何のためかという、西洋列強は軍艦、黒船をもって日本にやってくるんです



反射炉模型



昇平丸模型



150ポンド砲

から、同等の船を我が方も持たなきゃいかんということで軍艦を造ります。これは、薩摩藩が造った日本初の本格的な洋式軍艦昇平丸であります。この船は幕府に献上されて、長崎海軍伝習所の船になります。もうこうなってくると、外国船と区別付かなくなりますね。それで日本総船印というものを水戸の徳川斉昭と島津斉彬の共同提案で作ります。日本総船印を二人は白地に赤い日の丸にしようと提案します。これが日の丸、いわゆる日本国旗になっていくわけですね。昇平丸は鹿児島から江戸に向かう時に初めてこの日本総船印をつけて江戸に向かいます。工芸ガラスの薩摩切子は有名ですが、本来の集成館のガラス工場というのは、こういうものを作るのが目的ではなくて、軍艦の窓ガラスを作る。厚い板ガラスを作ることが主目的であったと思われます。

斉彬が亡くなった五年後に薩英戦争。生麦事件をきっかけに、英国軍艦七隻が錦江湾に入って参りますね。イギリス側は、もうアームストロング砲という弾が回転して出てくる大砲を使っております。飛距離、命中率、破壊力すべてこのイギリス軍艦の方が優れていたと思われれます。薩摩の使った弾はこのボーリングの球のような弾ですからね。実は、これで一番びっくりしたのが薩摩藩だったんです。つまり西洋の本当の軍事力を初めて体験



薩摩藩英国留学生

したんですからね。それで薩摩藩は薩英戦争後、イギリスに接近してさらに近代化を図ることになります。

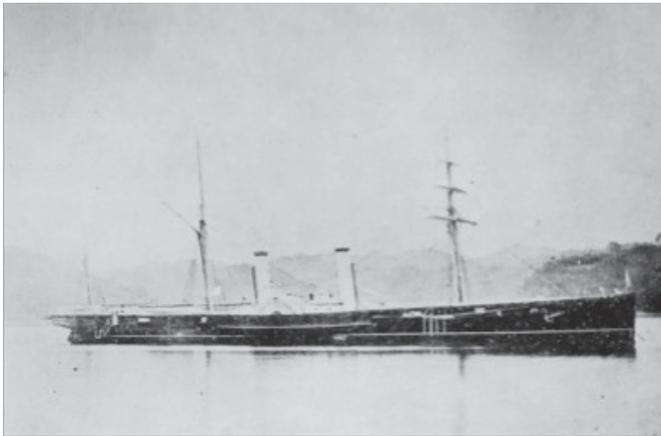
これが薩英戦争後にイギリスに派遣された若者たちです。密航ですよ。まだ鎖国時代ですから。たとえば文部大臣になりました森有礼、それから当時は松木弘安といっておりましたが、のちに外務大臣になりました寺島宗則です。一番小さい少年をご覧下さい。十三歳の少年ですね。この長沢鼎だけが日本に帰ってこないんですよ。イギリスからアメリカに渡って、アメリカのカリフォルニアでぶどう園を経営する。カリフォルニアワインを作るんですよ。向こうでぶどう王と言われて成功して、中年になってから一時帰国するんですね。

おもしろい人がいます。高見弥一。この人は鹿児島の人ではありません。土佐の人です。土佐にいる時の名前を大石団蔵といいます。土佐藩参政吉田東洋を斬った犯人の一人であります。吉田東洋を斬って逃げますね。薩摩に逃げてくるのです。薩摩藩っておもしろいところですね。関ヶ原合戦後、宇喜多秀家もかくまっております。そしてこの高見弥一もかくまっております。彼はその後、英語を勉強して、薩摩藩英国留学生としてイギリスに留学しました。

そしてそのような経緯でできたのが一番最初にご覧いただいた、当時東洋一の近代工場群、集成館です。このような姿で慶応年間には鹿児島に存在していたということでもあります。ですから鹿児島というところは、京都や江戸からは遠く離れておりましたけれども、常に海外の文化を受け入れていました。また、それに対応せざるをえなかったという地域でもありました。それが島津の長い歴史文化の中で、最後に咲かせた花だったのだろうと思います。こういうものは、七〇〇年間かかってできたものであって、突然変異ではないということでもあります。そしてそれは、南に遠く離れていても、常に中央の文化を色々な面で受け入れてきた、その柔軟性にもあるのだろうと私は思います。

幕末の京都・薩摩の交通事情

さて最後に、幕末の京都・鹿児島間の交通事情です。歩きますと、京都・鹿児島間は、陸路で約一ヶ月前後であります。ところがもう幕末にはこういう船でもって久光も西郷さんも大久保さんも行ったり来たりするわけです。蒸気船を使いますと、約一週間であります。ところが、同じ時代に江戸から京都、蒸気船を使いますと約四日でいけるところをやっぱり従来通り陸路でもって、二、三週間かけて將軍が京都に出てこられるんですよ。私は幕末の問題っていうのは、この時間の問題もあるんじゃないかと思っております。この時代長州も薩摩も真剣に近代化を図りました。同時に、持てる軍艦を有効に使っているんですね。艦数からいくと幕府の持っている軍艦の方がはるかに多いですよ。はるかに多いのに將軍はやっぱり歩いて三週間かけて京都に出て来られる。西郷さんは一週間で京都にやってくるわけですね。この時間の差、近代兵器をどう使うかということも幕末の諸問題の展開上、非常に重要な視点ではなから



薩摩藩軍艦春日丸

うかと思っております。

最後に西郷隆盛、大久保利通であります。薩長同盟、さてどこで行われたのかということではいろんな説がありますが、今日はもう詳しく申し上げる時間がなくなりました。室町頭町というところが今最も有力な薩長同盟が締結された場所ということになっております。そこに近衛家のお花畑があったということが、歴史研究家桐野作人さんの研究でだんだんわかかってまいりました。先程うかがったら室町小学校のある辺りだと聞いております。頭町というのは室町通りの突き当たりなので頭町。あの辺りにあつた近衛家のお花畑。お花畑からは田畑が見えた。その先に比叡山が望めた。まさにそういう場所だったのではなからうかと思えます。今一番有力な説として、室町頭町があげられております。ただ、室町小学校のあたりと申しましたけれども、本当にそこなのかどうかというのはもう少し研究の行方を見てもわかりませんけれども、今のところ一番有力な説として、室町頭町ということになっております。

ご質問の時間を少し取ってくださいと言われていたのですが、時間ギリギリになってしまいました。申し訳ございませんでした。長々となりましたけれども、京都から薩摩への文化伝承、いかに島津家と近衛家との間に古くからの関係、お付き合いがあつて、それをお互いに利用しながら家を存続をさせてきたかというようなところはおわかり頂けたのではないかなと思います。脈絡のない話で申し訳ございませんでした。以上で私のお話を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。